

RRI SIG10-24年度報告会

DCR-2 報告

東洋大学 高梨千賀子

- I. 参加の動機
- II. 会合で報告させていただいた内容
 1. DCR-2と研究の接点（問題意識）
 2. ダイナミックケイパビリティの視点からみたDX現場



I. 参加の動機

1. 持っていた問題意識

- IoTやDXなどデジタル技術を企業経営に導入する試みが2010年代後半から世界規模で本格化。デジタル化とそのデータの利活用を企業成長に結び付けている日本企業の事例はまだ少ない。その要因の一つは、既存の組織やシステムの弊害による組織変革の困難さ
- こうした環境変化に対して企業はどのように組織を変革し、持続的な成長に結びつけることができるのだろうか。

2. 参加の動機は、これまでの研究調査より抽出してきた「仮説」を検証したい

- レガシーを持つ日本製造企業の生産現場に焦点を当て、デジタル化とデータ利活用から価値創出・獲得するための組織変革プロセスと継続的に成長するためのメカニズムをダイナミック・ケイパビリティ(以下、DC)論の視点から考察する。
 - 環境変化への対応による企業成長/進化のメカニズムを説明するDC論は、発展途上
 - 日本製造企業の複数事例をQCA等の手法で丹念に分析することで、DC論の、特に企業成長/進化の要因(概念)やメカニズムについて改めて理論的検討を行いDC論の発展に寄与すると同時に、産業界でのデジタル化における組織変革と企業成長への道筋を提示する。

II. 報告内容

1.現状把握(DX動向2024等より)→問題をどう捉えるか？

実務界

DX疲れが広がる産業界からは、これまでの議論をさらに深化させ、個々の要因の背景にあるメカニズムを解き明かし、デジタル化における組織変革や企業成長に関して理論的に一貫したロジックを提供することが求められている。

学术界

IoTやDXなどの技術潮流は企業にとっては外部環境の変化→環境変化に対して企業はどのようにみずらを変革し、持続的な成長に結びつけることができるのだろうか。これは経営学の中心的な課題

2.視点としてのDC論

- 近年求められているのは外部環境のダイナミックな変化への対応→対応能力や変革による成長メカニズムを解き明かそうとしたのがDC論(Teeceら)

DC論

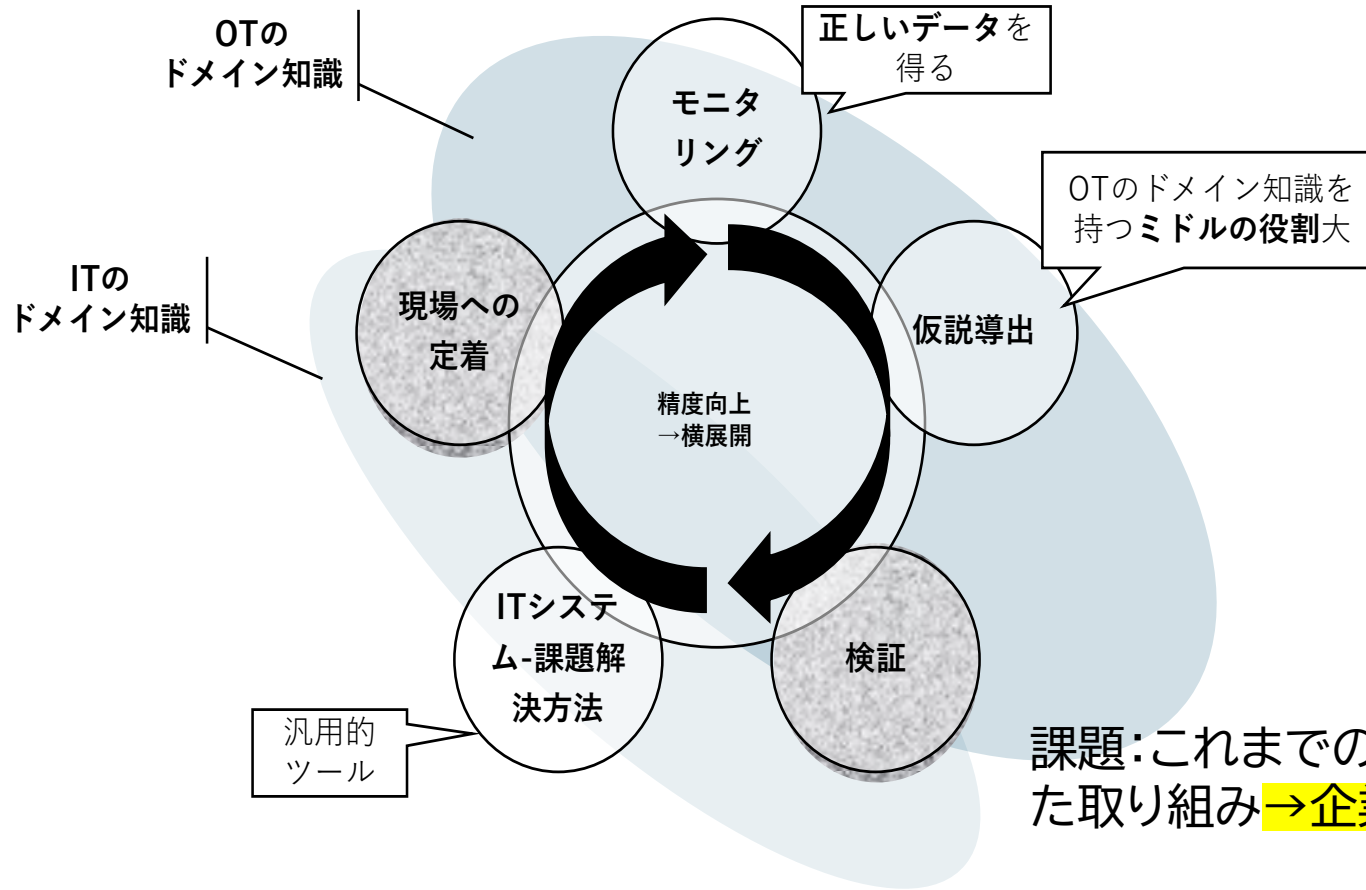
- 変化する環境に適応するために既存の企業の資源を再構成、再配置、再利用することで付加価値を最大化しようとする自己変革力がDC
- 経営資源を効率的に使用し利益最大化を目指す通常能力はOC(オーディナリー・ケイパビリティ)
- 企業が既存資源や資産、技術を再構成するには、社内外の補完関係にある資源や資産を結合(オーケストレーション)してビジネス・エコシステムを形成する必要
- さらに、企業は、環境変化に応じてOCとDCの相互作用を通して成長し、進化する。

このようなDC論は発展途上で課題も多い

- 理論を裏付ける実証研究の乏しさ→あいまいな概念
- ロジックの展開が不十分

→ DC論の内的妥当性を高めて理論強化するためには、さらなる実証研究が求められる。

ITとOTのドメイン知識 中間層が要
→OCの融合を通してDCとして発展させる



課題:これまでのDXは往々にして生産現場に閉じた取り組み→企業成長としていくには？

経営層によるDC発揮

システムの収益化
・グループ会社/
サプライヤーへの拡張
対市場のDX
・他社への（一部）
システムの外販
・新たなサービス展開

成果の結果、
組織を最適化

「現場の課題解決」を通して
達成すべき価値とは？

ドメイン知識(IT/OT)の
OC融合には中間層が鍵

財務データと
の関連付け

企業レベルでDCを発揮させるための
下地づくり

